０９／０６／２８　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　牧師

主　　題：来る者を拒む主２
聖書箇所：マルコの福音書　１０章１７－３１節

　多くの人たちはイエスのもとにさまざまな理由でやって来ます。ある人たちは自分たちが病であり、そこから癒されることを願って主のもとにやって来ます。ほかの人たちは主を恐れて主のもとにやって来ることがあるかもしれません。また別の人たちは安心や安全、また、愛されているという思いを得たいがゆえにイエスのもとにやって来ることがあるでしょう。また別の人たちは安らぎが必要だと言って、主のもとにやって来ることがあるかもしれません。これらの事柄一つ一つが必ずしも悪いわけではありません。ただ、もし私たちがイエスのもとに、ここに挙げたような理由だけでやって来るとするなら、イエスは私たちのことを受け入れることをしません。それはちょうどイエスが若い金持ちの役人を追い払った時と同じようなものです。

☆金持ちの青年が持っていた問題点

　前回、私たちがこの金持ちの役人の話を皆さんと一緒に学んだ時に、私たちはこの青年が最高の質問を持ってイエスのもとにやって来たことを学びました。彼は、最もふさわしい、最も正しい人物のもとに、どう見ても正しい態度で、この質問を持ってやって来たわけです。彼はまさに永遠のいのちを持っておられるから、その根源である方のもとに「どうすれば永遠のいのちを得ることができるのでしょう」と言ってやって来ました。彼は自分では律法を正しく守っていると思い込んでいたし、実際にそうだと考えていたのですが、それでありながら、自分には永遠のいのちがないということを正しく認識していたのです。そして、彼はその永遠のいのち、それは人生が終わることなく続く、いのちが永遠に続いて行くといういのちではなく、神との深い関係ゆえに喜びに満ち満足にあふれたすばらしい生涯である、その永遠のいのちが欲しくてしょうがなく、どうしてもこれを手に入れたいと願ったゆえに、人の目を気にすることなく、恥を受けることを承知で、群衆の面前でイエスのもとへと駆け寄って来たのです。そして、この主に「永遠のいのちが欲しいのです」と訴えたのです。

　彼はイエス・キリストが神と特別な関係にあるということを、「良い方」と呼んで公衆の面前で宣言しました。そして、彼はイエスが彼に告げることであるなら、どんなことでも喜んでするように見えました。聖書の中でも、最も救いを受ける準備が整ったかのように見えるこの青年に対して、イエスは非常に不思議な、あえて言うなら、非常に冷たい応答をされました。簡単に言うなら、イエスは彼を追い払ったのです。このような熱心な求道者が目の前に現われたことを喜ぶ代わりに、イエスは非常に冷たい応答をもって彼に対応しました。それはどのように冷たい応答だったのでしょう？イエスは「良い」と言ったその青年のことばを責めました。「あなたはそれがどういう意味なのか本当に分かっているのですか？」と。そして、彼にもうすでに彼が分かっていることを告げたのです。「律法を守らなければいけないでしょう」と。しかも、最も基本中の基本である十戒の中から命令を挙げて、それを守るなら永遠のいのちが得られるでしょうと言われたのです。彼はそんなことはもう分かっていました。よく分かってきちんと守っていると思っていたのに、永遠のいのちを持っていなかったからイエスのもとにやって来たわけです。ところが、イエスの応答はそのような冷たいものだったのです。

　このイエスの応答は破滅的な告白を呼び起こしました。青年はイエスのことばを聞いた時に「私はそのような命令は幼い頃からずっと守っています」と訴えたのです。けれども、この彼が守っていると言ったその宣言は、実は、いかに彼が律法を守っていなかったかということを証明するものでもありました。なぜなら、神が言われることは、もし律法を本当に正しくすべて守ることができるなら、永遠のいのちはその人のうちにあるはずだということだからです。でも事実、彼が永遠のいのちを持っていないということは、彼が律法を守っていなかったことを明らかにし、彼自身がそのことにすら実は気づいていなかったことを私たちに告げ知らせているわけです。私は律法を守っていますと言ったその告白は、事実、自分自身を罪へと定める、さばきへと誘う告白だったわけです。この青年の律法に対する間違った認識を聞いたイエスは、そこで彼が抱えていた非常に重要な問題点を指摘しました。

☆イエスの要求

　そこでイエスは二つの非常に厳しい要求をされました。それは（１）<u>自分自身を捨てる要求</u>であり、もう一つは（２）<u>イエス・キリストに完全に服従するという要求</u>でした。彼は自分自身のありとあらゆるものをすべて捨て、完全にイエス・キリストに服従する、従って行くこと、それが必要だったのです。前回も見たように、この要求は、特別に彼にだけイエスが意地悪で求めた要求ではありません。イエスはその働きの初めからずっと一貫して同じ要求をされて来ました。そのことを私たちは福音書のさまざ

まな箇所から見ることができますが、特に、イエスが語られたルカの福音書１４章のことばがそのことを私たちに告げています。イエスはこのように言われます。ルカ１４：２６－２７**「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」**、３３節には**「そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」**と記されています。

☆青年の選択

この要求を突きつけられた青年は、余りのショックに悲しみ打ちひしがれてイエスのもとを去って行きます。なぜなら、彼には多くの財産があったからです。ここに私たちは悲しい現実を見るのです。福音書の著者たちは、ここで彼が持っていた内側にある非常に大きな悲しみ、嘆きをことばによって表わしています。そこで使われたことばを皆さん覚えておられますか？イエスがゲッセマネの園で悲しみ嘆き、主の前に祈ったその苦しみの表現がここで使われていたのです。彼は永遠のいのちが欲しかったのです。彼は御国の相続者の特徴である「永遠のいのち」を自分のものにしたかったのです。余りにもそれが欲しくかったゆえに、恥も外聞もなく、みなが見ている前でイエスのもとにやって来て、イエスの前にひざまずいて「主よ、どうぞ教えてください」と言ったのです。けれども、彼にとってイエスが為された要求は余りにも高過ぎたゆえに、それを受け入れることができませんでした。いや、正確に言うならば、彼はイエス・キリストの要求に応えることができなかったのではなくて、応えないという選択を自らしたのです。

☆イエスはなぜこの青年を拒絶されたのか？

でも、どうしてイエスはこのように熱心な求道者を追い払うようなことをしたのでしょう。どうして熱心さをもってやって来たこの求道者、かわいそうな人物を優しく受け入れて、彼が願うものを与えて、彼が真剣な献身をすることができる準備が整うまで待ってあげることをしなかったのでしょう？なぜなら、彼は求道者だったはずです。永遠のいのちが欲しいと熱心に求めてイエスのもとにやって来たのです。このことは、まさにこのふたりのやり取りを一番近くで聞いていた弟子たちが思った疑問だったかもしれません。彼らはこのやり取りを見て不思議に思い、混乱していたのです。彼らの中では最も天国にふさわしいと考える人、しかも、イエスのもとに真剣な態度を持って、正しい質問を持って、正しく見える態度をもってやって来たこの青年を、どうしてイエスが追い払ったのか、彼らは理解できなかったのです。そのことが分かっていたイエスは、彼らが学ばなければいけなかった最も大切なレッスンを彼らに為しているのです。今日、私たちはその箇所をいっしょに見て行きます。

イエスはここで説明をされます。なぜ、主がこの青年を拒絶されたのか、そして、いったい何によって救いがもたらされるのか、これらを通して私たちははっきりと「救い」が何なのかを理解することができるようになります。そして、この箇所を見て行くに当たって、私たちはこの金持ちの青年がイエスに為した質問の答えを明確に得ることができるのです。「どうすれば永遠のいのちを得ることができるのでしょう？」、これは救われていないすべての人たちにとって非常に重要な質問です。また、もしかするとこの質問は、救われていると思っていても、実は、その実を一切実らせることができていない人にとってはもっと重要な質問かもしれません。そして、救われている私たちにとっても重要な真理です。なぜなら、私たちはこの福音を人々に語って行かなければいけないからです。

今日、私たちが中心的に見て行く箇所はマルコの福音書１０：１７－３１です。残念ながら、今日は３１節まで到達しません。前回も見たように並行箇所があります。マタイの福音書１９章１６－２６節、ルカの福音書１８章１８－２７節にも同じ記事が記されています。ですから、どうぞ皆さんの聖書に指を挟みながら、それらの箇所を通して主が私たちに教えようとしている非常に重要な福音の真理について、いっしょに学んで行きましょう。

マルコの福音書１０：１７－３１

10:17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、尋ねた。「尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいでしょうか。」

10:18 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかには、だれもありません。

10:19 戒めはあなたもよく知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え。』」

10:20 すると、その人はイエスに言った。「先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。」

10:21 イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」

10:22 すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持って

いたからである。
10:23 イエスは、見回して、弟子たちに言われた。「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。」
10:24 弟子たちは、イエスのことばに驚いた。しかし、イエスは重ねて、彼らに答えて言われた。「子たちよ。神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。
10:25 金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」
10:26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」
10:27 イエスは、彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」
10:28 ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」
10:29 イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、
10:30 その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。
10:31 しかし、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」

マタイの福音書　１９：１６－２６

19:16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」
19:17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」
19:18 彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。
19:19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」
19:20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」
19:21 イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」
19:22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。
19:23 それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。
19:24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」
19:25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょう。」
19:26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」

ルカの福音書　１８：１８－２７

18:18 またある役人が、イエスに質問して言った。「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」
18:19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。
18:20 戒めはあなたもよく知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』」
18:21 すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」
18:22 イエスはこれを聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」
18:23 すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。
18:24 イエスは彼を見てこう言われた。「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。
18:25 金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」
18:26 これを聞いた人々が言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」
18:27 イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」

共観福音書ではイエスが弟子たちに向かってこのことばを語っておられるその姿が記されていますが、

実は、ルカの福音書を見ると、イエスはこの時、去って行く青年を見ながらこのことばを語っていると記されています。これは、このふたりの会話が終わった後、弟子たちに対してイエスがこの説明をして行く時に、イエスは去って行く青年を眺めながら、弟子たちに対して語り始めたことがうかがえます。つまり、会話が終わってすぐにこのことが起こったわけです。マルコはここで**「イエスは、見回して、弟子たちに言われた」**と記しています（１０：２３）。いったい、この会話からどのような事柄を弟子たちが学んだのかをイエスは見極めようとしておられたのかもしれません。そのように弟子たち一人一人を見回した後、イエスは顔を上げられて、悲しみのうちに沈んで肩を落として去って行く青年を見ながら、**「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。」**と言われたのです。私たちはイエスと弟子たちの会話の中に、神だけしか教えることができないこと、なぜ、この青年が去って行ったのかという、その説明を聞くことができます。事実、イエスはこの機会を用いて、弟子たちに対して、どうそれば人が救われるのかということを明確に教えようとしておられるのです。１２人の弟子たちにとって、この会話ほど驚くべき会話はなかったかもしれません。そして、これは私たちにとっても非常に重要なレッスンであるわけです。ですから、この会話をごいっしょに見て行きましょう。

☆救いとは？　―　イエス・キリストはなぜこの青年を拒まれたのか？

１．イエスの説明（解説）

私たちがここで見る最初のことはイエスが為す説明です。

１）救われることのむずかしさ

イエスがこの青年を見上げて語られた真理は「救われることのむずかしさ」です。そして、イエスはそのことを非常に分かり易いたとえを挙げて、私たちにはっきりと示されるのです。イエスはこのことばを、マタイの福音書によるなら**「まことに、あなたがたに告げます。」**ということばで始めます。これは非常に重要なことを弟子たちに語ろうとする時によく使われることばです。ですから、イエスはここで「大切なことをあなたがたに言いますよ」と言っているわけです。弟子たちはこのレッスンを学ばなければなりませんでした。この機会に、イエスは弟子たちの心にこのことを深く刻もうとされたのです。

◎裕福だから天の御国に入れないのでしょうか？

イエスが言われたことは**「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。」**でした。けれども、ここで問題にされているのはお金、財産ではありません。イエスが言われていることは、天の御国に金持ちは一切入ることができないということではないのです。けれども、この青年のように裕福な者が御国に入ることはより困難であることは、イエスが示されているとおりです。マルコがここで記録していることは、イエスがこのことばを語られた時に、弟子たちが**「イエスのことばに驚いた。」**というものでした。２４節に記されています。そして、その時に**「イエスは重ねて、彼らに答えて言われた。『子たちよ。神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。』」**と言われています。弟子たちが最初に驚いたのは、彼ら金持ちは天の御国に一番近い存在だという考え方をしていたからです。なぜ、彼らが金持ちだったのかというなら、そこには神からの祝福があるからだと人々は信じていたのです。神の祝福があるから、何をしても成功し、財産が貯えられる、だから、お金持ちは神の祝福を得ているのだと考えていたわけです。ですから、もし、天国に入る入り口に列ができているとするなら、神からの祝福にあずかっている金持ちが一番先頭にいることになり、それゆえに、彼らは、金持ち、裕福な者が天の御国に入ることはむずかしいとイエスが言うのを聞いた時に非常に驚いたわけです。なぜなら、イエスが彼らが今まで聞いて来たこととは全く逆のことを言われたからです。

この驚きに対してイエスはさらに重ねて驚くべきことを弟子たちに伝えています。マルコ１０：２４で２回目にイエスが**「子たちよ。神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。」**と弟子たちに言った時、ここではだれを指してそのように言っているのか書かれていないことに皆さんお気づきになりますか？イエスはここで**「神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう」**としか言っていないのです。何を言いたいのでしょう？イエスはここで「金持ち」のことを言っているのではありません。確かに、金持ちがはいることはむずかしいのです。でも、むずかしいのは金持ちだけではありませんと言っているのです。すべての人に適用しているのです。だれでも、天の御国、神の国へはいることは非常に困難なことだと言うのです。つまり、イエスは財産が問題ではないと言っているのです。財産だけが問題なら、イエスはここで「金持ち」と言うはずです。でも、問題は財産ではないのです。問題は私たち人間なのです。人間がお金をたくさん持っている、財産をたくさん携えていることは、より困難になることはその通りかもしれません。けれども、お金を持っていない貧しい人でも天の御国にはいることは難しいこと、困難なことなのです。

２）そのたとえ　―　人による救いは不可能

いったい、どれ位困難なのでしょう？イエスはそのことを非常に分かり易いたとえをもって言い表わ

しています。２５節**「金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」**と。皆さん、想像できますか？非常に不思議な光景が頭に浮かびます。今日、私たちはこの２５節のイエスが言われるたとえに関して、このような解釈を聞くことがあります。それは、イスラエルのエルサレムの城壁には「針の穴」と呼ばれる小さな小さな門があって、その門に入るには、それが余りにも小さいゆえに、らくだを引いて来た商人は自ららくだから降りて、すべての荷物を下ろして、らくだを跪かせて通さなければならない、そのような門があったと言うのです。これはメッセージをするには、非常に分かり易いすばらしい内容かもしれません。なぜなら、私たちが神の御国に入って行くためには、ありとあらゆるものを下ろして、神の前に跪いて入って行かなければいけないというのは非常に分かり易いメッセージだからです。しかし、問題はこのような門が存在するという証拠は一切ないということです。イエスが言っているのは、ありとあらゆる荷物を下ろして、らくだを跪かせればかろうじて入ることができる門がありますということではありません。そうすればかろうじて天の御国に入ることができるのですということを言っているのではないのです。

皆さん、らくだが針の穴を通るところを見たことがありますか？らくだがどれぐらい大きいか知っていますか？だいたい想像がつくだろうと思います。ちなみに、メソポタミア地方には「象が針の穴を通ることはできない」という、これと非常に似たたとえ、同じような金言があります。何を言っているのでしょう？当時、パレスチナ地方において、一般的に知られている最も大きな動物はらくだでした。最も大きな動物であるらくだが針の穴を通ることは可能だと思いますか？聞かなくても分かります、不可能です。イエスはここで何を言っておられるのでしょう？それは、らくだが針の穴を通ることより、金持ち、もしくは、あえて置き換えるなら、人が天の御国に入ることの方がむずかしいということです。「どれ位困難なのですか？」という質問を弟子たちがしたとして、イエスがそれに対してはっきり答えたことは「不可能だ」ということです。イエスがここで強調していることは「救いの不可能さ」です。救われることはあり得ないというのです。だれもが天の御国に入るのに一番近いところにいると考えていた金持ちは、実は神の国に入ることなど絶対にできない存在だと言うのです。彼らが天の御国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方が容易いと。

皆さん、驚きませんか？私たちは天の御国をそのように考えているでしょうか？もしかすると、私たちは様々な集会でこのようなことばを聞くかもしれません。「救いは簡単ですよ、信じればいいのです、信じるならあなたは天の御国に入ることができます」と。けれども、イエスからそのようなことばを聞くことは絶対にできません。なぜなら、イエスは言われます。人が救われるよりは、らくだが針の穴を通る方が容易いと。もし、私たちがこのことばを金持ちだけに適用するなら、私たちは大きな間違いを犯しています。なぜなら、聖書の中には多くの金持ちが救われているからです。アブラハムやダビデやヨブといった人物は神の前に正しいとされ、天の御国を受け継ぐ者であると宣言されています。彼らはみな金持ちです。金持ちが天の御国に入ることが不可能なら、彼らが天の御国にいることはありません。問題は財産ではないのです。

では、いったい何なのでしょう？それは金持ちが持っている彼らの財産に対する依存であり、強いて言うなら、彼ら自身に対する依存なのです。この青年はイエスのもとを去って行きました。天に宝を積むことよりも、この地上における宝の方が彼は大事だったのです。彼にとってみれば、律法は自分ですべて為すことができるものだから、彼は何とかして天の御国に入って行くことができるその方法で、自分の力で天に行こうとしていたのです。だから、イエスが「すべてを捨ててただわたしに従って来なさい」と言われた時に、彼はそれを受けることをしなかったのです。なぜなら、彼にはもっと大切でもっと信頼するものがあったからです。確かに、彼は自分が望んでいたいのちを手にしていないということを知っていました。けれども、彼は主が彼に求めることをやりたいとは思わなかったのです。このような金持ちが天の御国に入ることは不可能です。なぜなら、彼らは自分の力、自分の能力に頼って天の御国に入ろうとするからです。この当時の多くの人たちは、（後でもう少し詳しく説明しますが）金持ちは自分の財産で天国行きの切符を買うことができると考えていました。けれども、イエスはどのような人間的な努力や能力によっても天の御国に入ることは不可能であると断言しています。なぜなら、どんなにすばらしい人物でも、どんなに能力のある人でも、どんなに財産を持っている人であっても、自分の内側にある、罪の問題を解決できる人物はだれひとりいないからです。

難しいことではないのです。わざわざその意味を変えて理解する必要もないのです。イエスが言われていることは「不可能だ」ということです。人間が人間の手で永遠のいのちを得ることは絶対にできません。たとえ、それがだれであってもできないのです。

２．弟子たちの反応

圧倒的なまでに明確なイエスのこの解説を聞いた弟子たちの反応は、どんなものだったでしょう？そのことを２番目に見ましょう。２６節**「弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救わ**

れることができるのだろうか。」。イエスの明確な説明を聞いて、弟子たちは二つの反応を示しました。マルコとマタイは最初の応答を記しています。そして、ルカも含めた三つの福音書は２番目の反応を記しています。これら二つは非常に密接に関連したものですが、別々に分けて見たいと思います。

１）１番目の反応　―　驚嘆

最初の反応、それはマルコとマタイに記されていますが「驚嘆」でした。彼らは驚いたのです。それも単なる驚きではありません。余りのショックに身動きが取れなくなるほど、凍りついてしまうような驚きです。マルコもマタイもともにここで非常に大きな驚きのことばを使っています。「正気を失う」と訳すことができるかもしれない、そのような大きな驚きです。しかも、ここで使われている動詞の形は、この驚きの思いがしばらくの間継続していた姿を表わしています。彼らは一瞬だけ驚いたのではないのです。しばらくの間、この状態で留まっていたのです。実際に彼らがことばを出すまでにどれ位の時間があったのか私たちには知る由はありませんが、私が想像するのは、イエスが「らくだが針の穴を通る方がやさしいです」と言った時に、弟子たちの口はあんぐりと開いて、彼らは全く反応することができないまましばらく呆然とお互いの顔を見回して、そして、ぼそっと「じゃあ、いったいだれが救われるのだろう…」とつぶやく姿です。しかも、単に驚いたということばが使われているだけではなく、マタイの福音書では**「たいへん驚いて」**（１９：２５）ということばが使われています。この**「たいへん」**と訳されていることばは、時に激しい暴れる姿を表わす、そのような表現で使われることばです。新約聖書の中でこのことばが使われているのは、２階の部屋で弟子たちと最後の晩餐を取っている時「この中にわたしを裏切る者がいます」とイエスが言われた時に、弟子たちが非常に悲しむのですが、それが同じことばです。どれ程のショックかお分かりでしょうか？十字架に架かったイエスの上に、いよいよ死が臨んで来る時に大きな地震などの大変な天変地異が起きました。その時にそこで見ていた百人隊長が非常な恐れを感じます。これも同じことばです。また、このことばは黙示録の中で一連のさばきである「鉢のさばき」が起こっている時に、最後に天から大きな雹が降って来るのですが、その雹が降る激しさを表わすことばとしても使われています。どれ程驚いたか想像できますか？マルコは**「ますます驚いて」**（１０：２６）と言います。なぜなら、マルコはもうすでに弟子たちが驚いていることを表わしていたからです。もうすでに驚いていた弟子たちは、さらにこれ以上ないほど驚いたのです。

イエスの言った「金持ちは天の御国に入ることができない、それは不可能である」というそのことばに、彼らは想像を絶する驚きを覚えたのです。なぜ、このような大きな驚きの反応を示したのでしょう？先ほどから何度も言っているように、彼らは金持ちは天の国に入ることができるという考えをもっていたからです。彼らは単に、金持ちが神からの祝福を一身に受けていると考えていただけではなく、ユダヤ人たちはもう何世紀にも渡って、彼らが与えれば与えるほど神からの厚意をより多く受けるという考えをもっていたのです。ヨブが三人の役に立たない友人たちから助言を受けた時に、三人の友人たちが考えていたのはまさにこのことです。あなたが神からのろいを受けてこのような不幸な状態になっているのは、あなたが神の前に罪を犯したからだと言います。だから、財産を得て裕福な生活をしている時は神からの祝福があり、悪いことをしていると神からののろいが起こる、それだけではなく、彼らは与えることによって、なお神からの厚意を受けることができる、神の国に近いと考えていたのです。

だから、金持ちが天の御国からもれることなど想像できなかったのです。実際に、ユダヤ教のラビたちが書き記したユダヤ教義の本の中には、このようなことばが記されています。「慈善的な施しはあらゆる捧げ物よりもすばらしく、それは律法全体に相当する。そして、それは地獄の責めから人を救い出し、人を完全に義なる者とする」と。つまり、金持ちが多くを施して行けば行くほど彼らは律法を全うして行くことになると言うのです。そして、その額に応じて彼らは完全な義になることができると言うのです。つまり、お金によって天への切符を買い取ることができるとするのです。これは当時の人たちの間に蔓延していた考え方であり、弟子たちも同じような思いを持っていたのでしょう。それゆえに、それと全く違うことを聞くことは、驚き以外の何物でもなかったのです。

２）２番目の反応　―　質問

そして、その驚きから２番目の反応が出て来ました。彼らの質問、つぶやきです。**「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」**、弟子たちはイエスが何を言わんとされたのかをよく分かっていました。だから、彼らはある意味で反論をしたのです。「それなら、だれも救われることなどできないではないですか？いったい、だれが救われるのですか？もし、金持ちが天の御国に入ることができないのなら、だれひとりとして天の御国に入ることなどできません！」と。この応答は私たちも理解できるでしょう。なぜなら、彼らは金持ちは天の御国に入ることができると思っていたから、一番近い人が拒絶されるなら、その後ろに続く人たちが入ることなどできるわけがないでしょう！と、それゆえに彼らはつぶやいたのです。彼らは悩みのうちに叫んだのです。「いったい、だれが天の御国に入ることができるのですか？」と。

もし、私たちがこの場にいたら、私たちが弟子であったら、とても居心地が悪いと思いませんか？なぜなら、イエスはこれまでイエスに一生懸命ついて来た弟子たちに対して、その周りの群衆に対して、「あなたたちは絶対に神の御国に入ることはできません」、「だれひとりとして救われることはない」と言ったのです。そのような宣言を聞くことは私たちにはいやなことです。だから、多くの人たちはここで言われていることばを違うように解釈して、そのインパクトを弱いものにしようとします。彼らは何と言うのでしょう？ここで言っているのは、実は、救いのことではない、ここで問題にされているのは、救われた人たちが弟子となってイエスに従って行くのか、従って行かないのかということ、より高い献身をもってイエス・キリストに従って行くことですと。このような解釈をして、これは救いが不可能だということを言っているのではないとする人たちはたくさんいます。でもよく見てください。文脈から見て、そのようなことは絶対に考えられません。最初の質問は何でしたか？金持ちの青年がやって来て聞いたことは「どうすれば永遠のいのちを得ることができるのでしょうか？」ということでした。マタイの福音書の１９：１７ではイエスは**「もし、いのちにはいりたいと思うなら、」**と答えています。ここでも「いのち」のことを言っています。また、この文脈はイエスが天の御国、神の御国に入ることについて話をしていることを教えています。同じ内容のことです。そして、弟子たちはここで、「いったいだれが救われますか？」と言っています。また、このあとマタイ１９：２９ではイエスは永遠のいのちをだれが受けるのかについて話をしています。**「また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」**。ここで言われているのは、一貫して救いの文脈です。永遠のいのちに関することなのです。永遠のいのちをすでにもっている者たちが、どのように生きて行くのかということではないのです。永遠のいのちをもっていない人が、どうすれば救われ、永遠のいのちをもち、天の御国に入って行くことができるのかということを言っているのです。イエスは言われます。「だれも入ることはできません」と。

しかも、弟子たちはここで**「救われることができるのだろうか。」**と聞いています。このことばがもっている意味は非常に深いものです。だれかが救われるには何かから救われなければいけません。救われる対象がなければいけないのです。そして、弟子たちはここで、明らかに彼ら自身が、人間が、今直面している様々な問題や、悪い状況、悪友たち、どうしようもない妻や夫、不満だらけの仕事、または、仕事がないこと、病気や自分自身の様々な状態、問題からの救いのことを言っているのではなくて、永遠のさばきからの救いのことを言っているのです。永遠のいのちをもたないがゆえに、神との関係を得ることがなく、神の前に永遠にのろいを受けるそのさばきからの救いのことを言っているのです。彼らは神の御国に入らないことを言っているのです。その代わりに、滅びの御国へと入って行く、そのことを話しているのです。いったい、だれが救われるのでしょう？だれか救われる人がいるのでしょうか？もし、聖書の中に出て来る最も熱心な求道者がイエスによって追い返されるとするなら、いったい、だれが救われるのでしょう？もし、金持ちや裕福な者たちが天の御国を受け継ぐことがないなら、いったい、だれが救われるのでしょう？弟子たちの驚きが分かりますか？

３．イエスのことば

１）私たちは自分で自分を救うことはできない

イエスは彼らに対してまとめのことばを投げかけます。マタイとマルコはここでイエスが弟子たちを見つめる姿を記しています。**「じっと見て…」**（マタイ１９：２６、マルコ１０：２７）と。「じっと見つめる」イエスの顔は、多分その場で実際に見ていたマタイとペテロ　―マルコの福音書はペテロの証が土台になっています―、彼らにとっては非常に印象深いものだったのでしょう。そして、イエスは救いに関する真理の中で、最も重要な真理を彼らに告げようとするのです。弟子たちが出した質問に対して、イエスは「救いのシステム」について、最も大切な内容を私たちに教えてくれます。自分たちの力で天の御国に入ることができると考えていたすべての人たちにとって、このイエスの宣言は明らかに恐ろしいものです。だれかを天の御国に押し込むことができると、そのように考えている人たちにとって、このイエスの宣言は心砕かれるようなものです。けれども、私たちはイエスのことばにしっかりと耳を傾けなければいけません。

イエスは弟子たちに対して言いました。１０：２７**「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」**と。ここでイエスが言っていることばは、非常に驚くべきことばですが、でも、これは新しい教えではありません。旧約聖書からずっと言われ続けていることです。旧約聖書が実際に口にしなかったかもしれないとしても、ずっとそこで告げ続けてきた内容です。それをイエスは明確に短いことばで言い表わしただけなのです。人にはそれは不可能である、私たちは自分を救うことはできないということです。ここで文章を読む力のある人ならだれでも分かることですが、**「それ」**ということばが何を表わしているか、それは「救われること」です。救われることは不可能だと言っているのです。人間のレベルにおいてだれかが救われることはあり得ないと。しかも、イ

エスは「金持ちには」と言いませんでした。「財産を持っている人たちには」、「裕福な人に」とは言わなかったのです。イエスは**「それは人にはできない」**と言ったのです。だから、ずっと言っている通り、問題は財産ではないのです。問題は私たち人間なのです。ちょうど、らくだが針の穴を通るのが不可能なように、人が自分の力で神の御国へと入って行くことはできないのです。たとえ、どれだけの財産や能力をもっていたとしても、功績を残したとしても、だれひとりとして神の前に立ってそれを誇ることができる人はいません。みな、この義なる神の前にあって、のろわれ、さばきを受ける者なのです。そして、自分自身の堕落した性質の中にあって、私たち人間が神の前にできることは何ひとつないのです。私たち自身を聖めることも、私たち自身を義とすることも、神の前に立つ価値のある者となることもできないのです。

パウロはそのことを、ローマ人への手紙の３：１９－２０で明確に言い表わしました。皆さんよくご存じの箇所です。**「さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。:20 なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」**と書かれています。神が求めていることは常に同じです。レビ記１９：２で神は**「イスラエル人の全会衆に告げて言え。あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。」**と言われました。イエスは同じことばをマタイの福音書５：４８、山上の説教の中でこのように言われました。**「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」**と。これが天の御国に入るための神の条件なのです。あなたがたはわたしと同じように聖でなければいけないし、あなたは完全でなければいけない、そうでなければ、だれひとりとして御国に入ることはできないと言うのです。この地上に存在した者で、唯一その条件を満たすのはイエス・キリスト、ただひとりです。私たちが何をしたとしても、その条件を下げることはできません。私たちがどれだけ与えたとしても、私たちは特別な厚意を受けることはないのです。私たち自身では救いは不可能なのです。

２）私たちの希望は神の働きにある

皆さん、どうして人がイエス・キリストの福音を信じ、イエス・キリストのもとにやって来ないのかご存じですか？理由はここにあります。人間が自分自身を救うことは不可能だからです。自分たち自身の願いをもって、自分の条件で神のもとにやって来てもそこには救いはないのです。人は全く自分を救うことはできないのです。では、いったいだれが救われるのでしょう？私たちも弟子たちと同じように尋ねるではないですか？いったい、どうすれば人は救われるのでしょう？と。イエスは答えます、**「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」**（マタイ１９：２６）と。**「しかし、…」**、ある著名な註解者はこの**「しかし」**ということばを「神に感謝します」と言います。なぜなら、ここに希望があるからです。私たち人間には到底できないことをできる方がいるのです。「神にはできる、神には不可能なことがない」、これこそがまさに私たちに与えられている慰めです。私たちに与えられている希望です。これこそがまさに人が救われる原因なのです。

私たちはここで、人間ができないことを正しく理解しなければいけないし、そのできないことを神ができることを知らないといけません。そして同時に、確かに、神が何でもできるということは、一般的に様々な分野に適用することができますが、特に、この文脈において、救いにおいてその通りだと言っているのです。そのことを忘れてはいけません。人間にはできないこと、自分を救うこと、人が救われることを、神はできるとイエスは言われます。このことは聖書がはっきりと私たちに教えてくれます。例えば、ヨハネの福音書１：１１－１３にはこのように書かれています。**「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」**と。また、イエスはニコデモに言われました。ヨハネ３：３，５**「イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。…:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」**と。ヨハネの福音書６：４４では**「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」**と言われました。神が引き寄せることをしない限り、だれもイエスのもとに来ることはないのです。

パウロは言いました。エペソの手紙への２：８－９**「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。」**。旧約聖書も同じことを言っています。申命記３０：６には**「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。」**と書かれています。神が心の包皮を切り取ると言うので

す。そうすることによって、私たちは初めて「心を尽くし、思いを尽くして、私たちの父なる神を愛することができる」ようになると言います。救いの源は一つしかありません。神が私たちを救うのです。だれひとりとして自分の力で天の御国に入ることはできないのです。神だけがそれをすることができるのです。私たちはこの真理によって慰められなければいけません。なぜなら、たとえ、どれ程困難な人物と出会ったとしても、心頑なな人に出会ったとしても、神が働くなら、その人は針の穴を通ることができるのです。だから、私たちは希望を失ってはいけないのです。たとえ、どんなに困難な人物に出会ったとしても、どれ程私たちを迫害する人に出会ったとしても、神のみことばを正しく宣べ伝え続けなければいけないのです。それが私たちに課せられている責任なのです。

多くの時に、私たちは何とかして、らくだに針の穴を通らせようとします。時に、それは非常に大きな針を作って、すごく大きな穴にして、そこかららくだを通すことをするかもしれません。もしかすると、時には、その針があるように言っておいて、実は、その針はなく線だけ引いて、ここにありますよと言って、らくだをその横を通して、こちら側に来ました、おめでとうございますと言うかもしれません。でも、私たちはそんなトリックを使う必要は一切ないのです。なぜでしょう？分かりますか？だれも自分たちの力では救われないからです。でも、神が人を救うときには、らくだは針の穴を通るのです。私たちは救いの条件を下げる必要はないのです。人々の必要に合わせて、それに沿った福音を語る必要はないのです。むしろ、私たちは神が求める最も過酷な条件を彼らに課すべきなのです。なぜなら、神に引き寄せられた人は、それがたとえどれ程過酷な条件であったとしても、「私はそれを行ないます」と言うからです。

３）人には選択がある

金持ちの青年は永遠のいのちを求めて主のもとにやって来ました。けれども、彼はそれを得ることなく帰って行きました。なぜでしょう？イエスは言われます。「人は自分の力で救われない」と。彼にはある意味、どうすることもできなかったのです。なぜなら、神が引き寄せてくださっていなかったからです。彼は自分自身の富を捨てることができませんでした。自分自身の力に頼ることを止めることができませんでした。これらのことをしないという選択ができなった、そのことを明らかにしたのです。

主がもう一つ私たちにはっきりと教えていることは、単に自分自身が自分の力によって救いを得ることができないというだけではなく、また、私たちの希望が神の働きにあるということだけではなく、私たちが正しく福音を提示して行く時に、人々は自分たちがその選択をして主に従わないことを明確にして生き続けることができるということです。金持ちの青年は悲しんで帰りませんでしたか？彼は自分がその選択をしたということが分かっていたのです。私たちの働きは、主がされたように福音を伝えますが、そのときに、人々がその福音の条件を余りにもはっきりと理解するゆえに、私は自分を捨て自分の十字架を負ってイエス・キリストに従って行きたくないのですということを明確にしてその場を去って行くか、そのことを明確に理解したゆえにイエス・キリストに従って行くのか、その二つの選択点に彼らを導くことです。救いは私たちの責任ではありません。なぜなら、私たちは自分自身を救うことができないのと同じように、どれだけ頑張っても、人を救うことはできないからです。救いが明確に示されても、それを受けて従って行く決心はその人のものです。イエス・キリストの救いには厳しい条件があると知るべきです。

でも、神が働くときに人は必ず救われます。皆さん、救われていますか？神は皆さんを引き寄せてくださいましたか？それゆえに、皆さんは神が求める条件に対して「私はそれをします」と言っておられますか？もし言っていないなら、皆さん、考えなければいけません。本当に、神が皆さんを引き寄せてくださっているかどうか？もし、皆さんがそれをしていると言うなら、皆さんはその歩みを続けて行かなければいけません。救われた者がどのような生き方をして行くのか、そのことは次回、皆さんとこの学びをする時に見て行きたいと思います。